



THE NEWS TOKYO NODAI

東京農業大学
世田谷キャンパス 大学本部/大学院・応用生物科学部
地域環境科学部・国際食料情報学部・短期大学部
厚木キャンパス/大学院・農学部
オホーツクキャンパス/大学院・生物産業学部

編集/東京農業大学学長室
発行/東京農業大学出版会
〒156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1

ホームカミングデー開催 母校でつなぐ“絆”

世田谷キャンパスで6月20日、第15回ホームカミングデーが開催された。当日は卒業生たちの帰郷を歓迎するような爽やかな晴天のもと、同級生、先輩後輩、恩師、教員、それぞれが再会の時間を楽しんだ。

東京農大生の案内のもと、変わりゆくキャンパス内を巡るキャンパス見学ツアー、卒業生だけでなく近所の農大ファンも楽しみにしている卒業生蔵元が集結する酒の即売会、卒業生農家の野菜の販売、教育者会



懐かしい仲間たちと懇親会で乾杯！

また百周年記念講堂で行われた式典、講演会では親子三代で東京農大に通ったご家族を表彰するなど、東京農大の絆をさらに深める一日となった。当日は約5000人の卒業生が来場した。



農大物産即売会では名酒がズラリ



名物「青山ほり」大根踊り



現役学生が新校舎を案内

青年海外協力隊派遣50周年記念シンポジウム —東京農大と協力隊—を開催

ホームカミングデーが開かれた6月20日、世田谷キャンパス横井講堂で青年海外協力隊員派遣50周年記念シンポジウムが行われた。

東京農大は青年海外協力隊とともに歩んできた。本学が協力隊に送り出した卒業生はこれまでに1000人を超えている。実践教育をモットーに国内外の農業分野で活躍する人材を送り出してきた本学は、1956年に農業拓殖学科を設置し、早くから開発途上国に目を向けていた。

1965年7月には大学内に農業拓殖学科長を委員長とした協力隊応募者選考委員会が設置され、卒業生の派遣を後押しした。この年に選抜された7人は9月の協力隊第1次隊に応募し、全員採用され、12月に協力隊第1次隊第一陣2人がラオスへ出発した。



フロンティア入試

来たれ挑戦者たち

オホーツク

東京農大「生みの親」榎本武揚公のチャレンジャー精神やフロンティアスピリットに共鳴する学生を広く募集するため、設立125周年となる2016年度（平成28年度）入試から生物産業

学部で「榎本武揚フロンティア入試」を開始する。昨今グローバル化が進む社会に生きつつローカル化を考える、すなわち国際的な視点に立ち地域活性化や地域創生の実現を考えることが重要視さ

れている。同入試はオランダ留学等も経験した近代の万人榎本先生の精神、そして農大精神を継承し、北海道の大地で新たなフロンティアを築く学びを展開することを熱望する人材のための制度である。この入試制度の合格者20人にはスカラシップが



給付され、卒業後は社会のリーダーとなりうる人材として活躍するため、入学後から独自のプログラムを受講する。まずは、7月25、26日のオホーツクオープンキャンパスに参加し、エントリーシートを入手、書類選考後、1、2次選考試験を通過することで、新たな世界を広げることができる。



前列左から榎本隆充氏、横井時輝氏、後列左から友田教授、矢口教授

二人の学祖を語る —自校教育の講演会—

東京農大総研研究会の榎本・横井研究部会が主催する講演会「二人の学祖を語る」が5月20日、横井講堂で開催された。本学

学生に対する自校教育を目的として行われた本会は、学

生教職員約200人が聴講し、本学の生みの親「創設者榎本武揚」と、育ての親「初代学長横井時敬」の二人の学祖が残した業績やエピソードから本学の歴史と日本の農業を学んだ。受講生にとっては自身が東京農大で学ぶ喜びを再認識する機会となった。

講演をしたのは、榎本隆充氏（榎本武揚直系子孫「曾孫」本学客員教授）、横井時輝氏（初代学長横井時敬直系子孫「孫」同客員教授）、友田清彦教授（食料環境経済学科）の3人。矢口行雄教授（地域環境科学部）の進行で和やかな雰囲気のある有意義な会となった。

親「創設者榎本武揚」の3人。矢口行雄教授（地域環境科学部）の進行で和やかな雰囲気のある有意義な会となった。

（図書館事務課）

ハラール食品プロジェクトスタート プトラマレーシア大と共同研究

東京農大総合研究所でハラール認証に向けた精製度の高い科学的な研究やハラール新食材の開発研究を推進し、国内外に有用な情報を発信することを目的とする。ハラール食品とはイスラムの法に基づき口にするのが許された食品で、ハラールであること



プトラマレーシア大研究所メンバーとの記念撮影

を確認する仕組みとして国際社会ではハラール認証制度が発展してきた。食材や加工法の多様化・複雑化により、より感度良く、迅速な認証技術の開発が望まれている。日本では農

林水産物や食品産業のイスラム圏への輸出拡大を図る取り組みが進められているとともに、年々増大するイスラム圏からの訪日観光客に対応した食品提供が課題となつてい

者一同プロジェクト推進の意を強くしたところである。情報発信の第2弾として、今秋には、政府関係者や産業界、国内外のハラール研究者などによるシンポジウムの開催を予定している。産官民を超えて活発な情報交換が行われることを期待している。

5月頃から世田谷キャンパス中庭付近で「ピツミが農大の森に営巣中」という鋭い独り言が響き渡るようになったが、東京農大のキャンパス内では営巣するのは珍しい。ハト程度の小さな体だが、ちよつかいを出しにくるカラスを果敢に撃退する様子も時折みられ、さすが猛禽類と言えよう。ヒナが無事に巣立つまで暖かく見守ってほしい。



日本部長の屋上で警戒するツミ (阿部伸太先生撮影)

進士名誉教授に「みどりの学術賞」

第9回みどりの式典が4月27日、憲政記念館で開かれた。天皇皇后両陛下ご臨席の下、安倍内閣総理大臣から、本学名誉教授の進士五十八先生に「みどりの学術賞」が授与された。



「みどりの学術賞」とは、植物、森林、緑地、造園、自然保護等に係る研究や技術の開発、学術上の顕著な功績のあった個人へ与えられるもの。進士先生には「日本庭園と農の融合による『みどりのまちづくり』の計画・政策・実践」に関する功績に対し贈られた。



「孤児作物 (Orphan Crop)」とはある地域では重要であるが、品種や栽培の改善が進んでいない作物を指す。

世界で約6千万トン生産されるヤマイモは日本産物であるが、欧米などでは食されることが少ないことから途上国への欧米からの研究投資がほとんどない。そのため収量はほとんど改善されず、日本のナガ

本で食されるナガイモやジンネンジョをはじめ、アジアやアフリカでは重要な作物であるが、欧米などでは食されることが少ないことから途上国への欧米からの研究投資がほとんどない。そのため収量はほとんど改善されず、日本のナガ

イモなどが機械化および集約化が進んで1ヘクタール当たり20トンあるのに対して、アフリカなどのヤマイモはその半分にとどまっている。研究チームでは平成18(2006)年度に熱帯地域のヤマイモの生産性が低い問題点を明らかにし、平成22(2010)年度には増殖法の改善および周年生産技術を開発し、国際熱帯農業研究所 (IITA) ナイジェリア) とヤマイモの研究に関する協定を結んだ。そして、頭脳循環を活性化する平成22(2010)年度若手研究者海外派遣プログラムでは、西アフリカの国々に開発した技術を公開し、現在では、染

ヨシのナトリウム排除機構を解明

生物応用化学科の樋口恭子教授は、ヨシのナトリウム排除機構の研究結果を発表した。ヨシは世界中で淡水から汽水域まで幅広く生育することができ、さまざまな有害元素に対して耐性を示す。ナトリウム濃度が高い土壌であってもヨシは地上部のナトリウム濃度を他の植物に比べて非常に低く保ち十分に生育することができる。ヨシの根に大量に侵入したナトリウムは導管を通過して地上部に輸送される前に導管から回収され根から排出されると考えられていたが、それを証明した論文はこれまでなかった。今回、放射性の²²Naと植物ポジトロンイメージング技術を用い、日本原子力研究開発機構との共同研究により、ヨシの根では根元から先端に向かってゆっくりとナトリウムが送り返されていることを証明した。今後はヨシ根でナトリウムを輸送・排出する分子に注目して解析を進める。その最も重要な輸送体分子をコードするヨシ由来遺伝子を塩に弱いイネに導入して、ヨシのように強力なナトリウム排除能力を示すイネを作出することが次の目標である。



プレスリリース本文は以下の通り公開されている。
<http://www.nodai.ac.jp/upload/1142ec80bd12fee9d201c9a5e63e44325.pdf>

人物を畑に還す奨学金

人物を畑に還す奨学金制度は平成24年に設立され、農林水産業及び関連産業の担い手となる人材育成のため、在学中の経済援助を趣旨とし、年額60万円を授業料から減免する。採用人数は50人以内。

「食と農」の博物館だより

博物館に久々にクリオネが帰ってきた。博物館ではオホーツクキャンパスの協力を得て、開館以来クリオネの生体展示を行ってきたが、専用水槽の不具合から約1年半の間中止せざるを得なかった。5月10日より導入できた新型水槽は円筒形ガラス製で、現在25匹のクリオネたちが可愛い姿を披露してくれている。また、東京農大の農場を整備し続け、農業機械の授業を担い、長年の役目を終えた貴重なトラクターなどの展示を6月から開始。東京農大の歴史のひとつを背負ってきたトラクターの雄姿をぜひご覧あれ。

第21回アジア陸上競技選手権 飯野摩耶(経済4年)が銅メダル



日の丸をつけ力走する飯野(左端)

第21回アジア陸上競技選手権大会(6月3〜7日/中国武漢)で、陸上競技部の飯野摩耶(経済4年)が女子1500m日本代表として出場し銅メダルを獲得した。アジアのトップアスリートが集結したこの大会でのメダル獲得は本学において初の快挙である。(決勝タイム…4分32秒90)

自分の力出せた

「昨年の世界学生クロカンに続き、日本代表として1500mに出場しました。多くのレースパターンがある1500mという種目

さらには世界に羽ばたくことを目指す。

五輪強化指定選手に

飯野は平成27年度のオリンピック強化指定選手にも認定され、財団法人日本オリンピック委員会より認定証が贈られた。

東日本学生相撲選手権

小柳が優勝

団体は3位



団体3位に入賞したメンバー、中央は個人優勝の小柳

第94回東日本学生相撲選手権大会(6月7日、両国国技館)で、相撲部が個人戦で優勝と3位入賞、団体戦3位という好成績を残した。個人戦決勝では小柳亮太(開発4年)が相手を立ち合いと同時に土俵際まで追い込み、圧倒的な強さのまま相手を土俵に転がした。楳佐古明輝(開発4年)は3位入賞。団体戦では準決勝で王者日本大学に惜しくも敗れ3位入賞となった。小柳は厳しい稽古も毎日嫌な顔を一切せず、現時津風部屋(日25年開発卒)の胸を借りた成果が出た。また小柄な選手や大げから復帰した選手も、日々の稽古を積み重ね強靱な力を得た。秋に狙うは全国学生相撲選手権大会での優勝だ。

オホーツク野球部

北海道春季リーグ優勝

全日本は2回戦敗退



オホーツク硬式野球部が北海道6大学野球春季リーグ戦で優勝し、2年ぶり13回目の全日本大学野球選手権大会(6月8〜14日)に出場した。2回戦で敗退した。

真。昨年の明治神宮大会で、全国ベスト4という成績を残し、全日本ではそれ以上の成績を目標に挑んだ。1回戦は富士大学(北東北大学連盟)と対戦し13安打と打線が奮起し5対3で勝利。先発のエース井口和朋(産経4)は、初回から140km中盤のストレートと切れ味のあるスライダーを中心に相手打線に絞らせない熱投で、144球14奪三振の完投勝利。

留学生交流会

毎年恒例の留学生パーティーが5月28日、世田谷キャンパスで開催され、留学生、日本人学生、教職員が互いに交流を深めた。パーティーでは新入留学生の自己紹介、各国の留学生が腕を振るった自国の料理が提供され、歌や踊りも披露された。パフォーマンスの中では、留学生による自国の文化や国旗についての解説があり、異文化理解を促進する契機となった。



民族衣装をまとい行われたパフォーマンス

PRAY FOR NEPAL!

募金活動

4月25日に起きたネパール大震災への募金活動を学生有志団体が行った。発起人の岡田采夏さん(ビジネス4年)は「留学生たちとの交流、東京農大とネパールとの深い縁を考えれば他人事とは思えず行動に出た。東日本震災の際には、アジア最貧国の一つとも言われるネパールから毛布などたくさんの方の支援を頂いた。国際バيوビジネス学科に所属する私にとつて、国際貢献は自然なこと」と語った。ともに活動したネパール人留学生クワル・エビンさん(同・左2番目)は自国の自宅も大きな被害を受けた。懸命に集めた募金額は赤十字社を通じて母国ネパールへ寄付される。



左：普通のトマト、右：高糖度トマト

野菜のお話⑤

あま〜いトマトの秘密!



呼ばれるトマトの人気の高い。これらはトマトの品種名ではなく、我々が食べた時に強い甘味を感じるトマトの総称である。では甘味の強いトマトの正体は一体何であろうか。甘いトマトには、「品種独自によるもの」と「栽培方法によるもの」がある。ミニトマトは糖度7〜8%以上と甘味の強いものが多く、大玉トマトは糖度5%前後と甘味の強くないものが多く、その大玉トマトに甘いという付加価値をつけるために栽培中に水分ストレスを与えることがある。その結果、果実への水分の流入が制限され、果実内の糖や有機酸などの成分が濃縮含有され果実は甘くなる。店頭に並ぶ高糖度・フルーツトマトの多くは、このような付加価値がつけられた栽培方法によって甘くなったものが一般的で、果頂部から多数の黄色いすじが入る特徴がある。(高畑健/農学科助教)



「優しさ」がつながり、日本とネパールの絆!